標準化された優秀性

――アメリカにおける私立エリート中等学校の伝統と変容――

岩　井　八　郎

Standardized Excellences:

Traditions and Changes in Elite Private Secondary Schools in America

IWAI Hachiro

1. はじめに

アメリカの教育全般を眺めると，アメリカン・フットボールのアナロジーで了解できる部分が多い。アメリカン・フットボールは，プレーヤーの役割を機能的に細分化し，厳密なルールによってゲームの進行を可能なかぎりコントロールする。偶然の出来事が生じる場面は，極端に限定されている。クオーターバック，ランニングバック，レシーバー，ディフェンスエンド，キッカーなどのポジションによって求められる運動能力の差異は歴然としている。ゲームは，細かく時計を止めて，獲得ヤードをメジャーする。それぞれの役割に適した高い運動能力を持つ選手が多いチームが，的確なコーチングによって導かれれば，確実に勝利をものにするだろう。確かに一般論ではそうである。しかし他方では，ゲームの終了まで，最大限，思わぬ出来事が生じる可能性も残されている。感情の爆発する瞬間が，周到に計算されて確保されている。そして，予想もしなかったスーパープレーがゲーム終了寸前に生じて語り草になる。何年かに一度くらいは，そのようなプレーが全米のどこかで現れ，繰り返しテレビで放送されている。これがアメリカン・フットボールの魅力の一つになっており，アメリカの機能主義的な能力観を見事に反映している。

アメリカの学校のカリキュラムを見ると，それはひじょうに細かく分類されており，その網の目を生徒は，選り分けて一歩ずつくぐり抜けなくてはならない。堅実なランプレーで，一ヤードずつ獲得するようなものである。しかし他方では，飛び道具も用意されている。ロングパスやギャンブルに相当するような近道がある。人は機能的に細分化された能力の網の目の中で，定位置を得ることが期待されている。ところが，既定の網の目を瞬時に飛び越えてしまうような予期せぬ能力が，突然のごとく表に現れることへの期待感も大きいだろう。

本稿は，アメリカのいわゆる「プレップ・スクール（prep schools）」について，既存の文献を中心に，その伝統と変容を整理する。アメリカの学校教育は「至高のシステム（The One Best System）」と呼ばれる公立学校が中心であって，現在でも私立中等学校（第9学年から12学年まで）に就学する者は10%以下である(1)。さらにその中でも，伝統と威信を誇り，プレップ・ス

クールといわれる寄宿制の私立中等学校に就学する者は1％を下回る[2]。プレップ・スクールは大規模に拡大したアメリカの教育組織の中で，きわめて例外的な部分である。しかし歴史的に数々の指導者や著名人を輩出している。今回の大統領選の候補者であった二人は，どちらもプレップ・スクールの出身者である。ビル・ゲイツもそうである。優秀な学校がかなり多くあり，伝統の違いもある。ただしプレップ・スクールの組織構造をみるならば，現在では，どの学校もよく似ている。必ず，Academics, Arts, Athleticsの部門があり，それぞれの科目が同じように強調されている。AP（Advanced Placement）のコースがあり，大学選択のためのカウンセラーがいる。進学先の大学を見ても，どの学校も，多少の程度の差はあるが，ハーヴァード，イェール，プリンストン，ブラウン，スタンフォード，コーネルというように分散している。特定の大学への偏りは大きくない。今日のプレップ・スクールでは，優秀さが標準化されている。どの学校もメニューをそろえて，「ビル・ゲイツ」の出現を待っているのである[3]。

2．オールド・マネーのカリキュラム

プレップ・スクールは，アメリカではオールド・マネー（ワスプの上流階級の中でも，南北戦争以前からの代々の富裕層）の教育システムとして登場した。主要な学校は，1880年代から1920年代までにかけて設立されており，戦間期，とくに1920年代から30年代に隆盛を見た。現在でも，名門寄宿舎学校の出身であることは，上流階級への所属を示す指標の一つとみなされている[4]。オールド・マネーにとって，ハーヴァードの前にいかなければならない学校として，セントポールズ，セントマークス，グロトン，ミドルセックスなどがある。これらは，監督教会（Episcopal church）系の寄宿舎学校である。St. Grottlesexとハーヴァードのアドミッション・オフィスは呼んでいる。またフィッツジェラルドは，セントマイダス校（St. Midas,「黄金学校」の意味）と名付けた。ハーヴァードやイェールやプリンストン出身ということだけでは，上流階級の指標にはならない。上流階級の子弟しか入れない排他的なプレップ・スクールの出身であることが，名門の学生クラブの会員となり，さらには社交界のメンバーになることに結びついた[5]。同じプレップでも，アンドーバーやエクセターとは区別されている[6]。

なぜ私立寄宿舎学校なのか。オールド・マネーの末裔であり，セントポールズ校からハーヴァード大を卒業したアルドリッジは，次のように説明している。

「ヨーロッパの上流階級は（イギリスを除いて）子弟を国家の教育システムに任せている。安定した階級構造のもとでは家庭が子どもに対して強い権威を持っているので，子どもたちがリセやギムナジウムで直面するどんな嫌がらせや危険も跳ね返せると信じているのである。一般にアメリカのオールド・マネーたちにはそのような確信がない。家族の構成が自由で，決まった枠にこだわらず複雑に入り組んで拡大し，代理や交代がさかんに行われ，財産によって家族が際限なく離合集散する。このような家族のなかで子どもを育てるのは賭けをするようなものだ。そこで家族は万難を排してうまい手を打たなければならない。「金」や権力でできることなら，なんとしても子どもたちを社会的にも感性的にもよい影響を与えてくれるような人々の手に委ねたい。セントマイダス寄宿舎学校はこうした問題を解決するために必要不可欠な存在である[7]」。

もちろん状況は徐々に変化してきた。「ハーヴァードのテコ入れで以前に比べればはるかに変

化に富んだ階層の子どもたちにも門戸を開くようになり，音楽，美術，科学，数学などさまざまな分野の才能にも理解を示すようになってきた。とはいえ，依然として慎重に考え抜かれたユートピア的社会であることには変わりはない。慎重に選び抜かれた学生，教師陣，教科課程，課外活動，そしてとりわけ道徳教育としかいいようのないものなど，すべてが渾然一体となって，最も厳格なオールド・マネーの基準に見合った「よい影響力」を保ち続けている。必ず予期した通りの結果が得られないとしても，子どもたちを委ねるにはきわめて効果的な方法である[8]」。

オールド・マネーの子弟はかつてに比べると，しだいにそのシェアを失い，アイビーリーグ校でも一定数に押さえられている。ハーヴァードの場合は，現在では約20%にとどめられている。成績が良くて，ハンサム，楽器もひけるしスポーツもやるような，申し分のないワスプの男がいたとしても，現在の選考基準のもとでは，アフリカ系アメリカ人のスーパーマンにはかなわないかもしれない。

オールド・マネーのカリキュラムは，名門プレップ・スクールにとっては「遺産」である。しかし20世紀の初頭においても，生徒はオールド・マネーの子弟に限られていたわけではない。19世紀後半以降に富を築いた新興の上流階級であるニュー・マネーの子弟も受け入れ，ユダヤ系やカトリック系の子弟も少数ながら就学していた。名門プレップ・スクールは，確かに上流階級のライフスタイルを再生産する場であったが，同時に，新興勢力の子弟を上流階級のライフスタイルへと同化させるという機能も担っていた。さらに20世紀初頭は，公立学校が大規模に拡大し，効率性を重視した改革が進み，IQテストが急速に普及した時期でもあった。プレップ・スクールが隆盛を見た時期は，すでにその外部はもちろん内部からも「遺産」を揺るがす動きが広がりつつあった。

3．フィッツジェラルドの観察

スコット・F・フィッツジェラルドは，1920年代から30年代あたりのプレップ・スクール出身のエリート青年に対する冷静な観察者であった。フィッツジェラルド自身も，プリンストン大の出身であり，彼の小説は，自伝的な色彩を強く帯びていると言われるが，そこにはワスプ上流階級（オールド・マネーとニュー・マネーの両方）に対する冷めた観察眼が潜んでいる。

「楽園のこちら側」では，プレップ・スクール（予備校と訳されている）の生活が次のように回顧されている。

「アモリーのセント・レジス（St. Regis）での二年間は，苦痛も勝利もあったが，彼自身の生活には，本当の意味ではあまり意義がなかった。それはちょうど，アメリカの「予備校」が大学の足の下でつぶされているので，アメリカの生活一般にはあまり意義がないのと同じであった。われわれには支配階級の自意識をつくりだすようなイートンはない。そうしたもののかわりに，われわれには清潔で，だらけて，害のない予備校があるのだ[9]」。

フィッツジェラルドは，流動的なアメリカ上流階級の基盤の弱さをみつめながらも，名門プレップ・スクールがもたらす威信を否定することはない。短編「泳ぐ人たち」には次のようにある。

「アメリカ人は鰭を持って生まれてくるべきであったというのが彼の好んで口にする科白で

あった。いや，現に彼らは鰭を持っているのかもしれない－金というのは一種の鰭ではないか。英国では，資産が強い定着意識を生んだが，根が浅くて動いてやまないアメリカ人には鰭や翼が入用であった。歴史や過去を教える必要はない。教育はいわば空間を飛翔するための装備の様なものであるべきで，遺産とか伝統とかという積荷を積んで動きをにぶらせるには及ばないという考え方さえも，アメリカでは繰り返されるところではないか[10]」。

しかし一方では，「子供たちにはセント・リージス（St. Regis）校に入れて，それからイェール大学にやるのさ[11]」とある。

セント・リージス（レジス）校とは，セントポールズ校のことである。「楽園のこちら側」は，当時のプリンストン大の学生生活を描いており，フィッツジェラルドの自伝小説といわれている。しかし，フィッツジェラルド自身との違いが重要であろう。フィッツジェラルドは，アイリッシュ・カトリックであり，カトリック系のプレップ・スクールであるニューマン校を経てプリンストンに入学している。これが小説とは異なる。小説の登場人物には，ニューイングランドのプレップ・スクールを経たイェール大卒が多い。小説には，オールドマネーに属するワスプ上流階級への羨望とその没落への冷めた視線が交差しているように思う。傑作『グレートギャツビー』の語り手はイェール大卒であり，恋敵もイェール大卒（オールドマネー）である。ニュー・マネーの主人公は，オックスフォード大で学んだという。階級と学歴が微妙に交錯している。短編「金持の御曹司」でも，ニューヨークの上流社会を支配するイェール卒の矜恃と静かな衰退が描かれている。フィッツジェラルド自身の挫折と転落への予感が，そこに重ねられているように読める。

4．ホマンズのスタイル

ジェージ・C・ホマンズといえば，『ヒューマン・グループ』などで小集団研究をリードしたハーヴァード大の社会学者として紹介されている。ホマンズにはイギリス中世経済史に関する業績もあるが，この点はあまり知られていない。ホマンズは，セントポールズ校の出身でハーヴァード大卒である。自伝から，当時の様子を垣間見ることができる[12]。

ホマンズは，1923年に第二学年（the second form）からセントポールズ校に入学して，1928年に卒業，ハーヴァードへ進学した。1920年代にセントポールズ校で学んだ。ホマンズのセントポールズ校への進学は，父親の決断であった。表向きの理由は，広い経験をさせるためであったそうである。しかし父親は内心では，ホマンズにハーヴァードのポーセリアン（Porcellian）というクラブのメンバーになるという特権を自分と同じように享受させたかったらしい。残念ながら，ホマンズは，このクラブのメンバーにはなれなかった。

広い経験を積むといっても，セントポールズ校は人里離れた場所にあり，女子学生との交流もほとんどなかった。ボストン地区出身の生徒（scholar を使っている）はわずかだが，東部諸州のオールド・マネーに属する出身の者が多かった。ホマンズ家の経済状況は中以下だった。それもあってか，新興成金層への嫌悪は相当なものである。

「広い経験を得たことといえば，にわか成金出身の少年（scholar ではなく boy を使う）に何人か出会ったことである。彼らは，財布の中身を自慢するやからで，がさつな者たちだった。偉大な富とは公共へのサービスを伴うものだという認識のかけらもない。これはロックフェラー家と

対照的だ。ノーブレス・オブリージの自覚など見せたこともない。金は，車に競馬にポロの小馬にマンションにと，はではでしくつぎ込まれた。……このような少年には，とくに才能があるとか頭が良いとか，話が面白いという者はいなかった[13]」。

洗練されたオールド・マネーとがさつなニュー・マネーという分類に当てはまらない少年もいた。ユダヤ系もいたし，奨学生も含まれていたらしいが，当時のセントポールズ校では，誰が奨学金を得ているかはわからなかった。

ホマンズはいじめられたようである。背が低くて，強くない。いじめたのは，野蛮なにわか成金の息子という図式だった。野蛮な成金の息子とイェール大学が結び付けられている。「がさつで野蛮なやつらは，少数派だった。そしてふつうはイェールにいった[14]」とある。

ハーヴァード大のポーセリアン・クラブのメンバーに選ばれるようにという父の願いがあったと述べたが，そのメンバーであることは，「ジェントルマン」の証であった。ホマンズの父がいうジェントルマンとは，単なる金持ちではなく，人を歓待して，寛大で，勇敢で，信頼できて，気高く，しかも公共の精神にあふれた人物である。ホマンズの父は，階級を金銭ではなく，品性（character）とライフスタイルによって定義した。その当時，St. Grottlesex の出身者は，エクセターやアンドーバーの卒業生よりも，ポーセリアン・クラブのメンバーに選ばれる可能性が高かったのである。

もちろんホマンズは，セントポールズ校で勉強がよくできた。ラテン語とフランス語に加えて，ドイツ語も卒業までにすらすらと読めた。教授法としては，間違いを事細かく指摘して，自信を失わせるようなやり方であったと述べられている。ホマンズの息子も，後にセントポールズ校に通った。息子と比較すると，言語の学習では（数と知識の深さの両方で）優れていたが，数学の授業については，今一つであった。

ホマンズは，1960 年代に中等学校における社会科学（とくに歴史）の教育を向上させる活動にかかわった。戦後の公立学校の教育との比較がある。

「私の青年時代に出会った教師のほうがすぐれていた。彼らには，ある科目を教えることができるのなら，それが義務だという確信があった。教育学部の感傷的な考え方によって蝕まれてはいない確信である。教育学部の卒業生は，私は英語を教えていない，子供たちを教えている，といったスローガンを唱えて，私を激怒させた。教師はある言語を教えることができて，その義務があるという信念を持っている場合に，子どもたちにその言語を教えることができる。子どもたちを教えるのではない。これがよい教育方法の唯一の秘訣である[15]」。

セントポールズ校の生活の中で，学業は重要であったが，成績の悪い者に劣等感を植え付けるようなことはなかった。学業による差は，あまり大きな意味を持たなかった。

「卒業生が，アイビーリーグ校，とくにイェール，プリンストン，ハーヴァードに入学することは重要だったが，それは社会的な理由による。実際には，どうしようもない愚か者でも，親が授業料を払えるかぎり，入学許可を得た。セントポールズ校の生徒の親にとっては問題のないことであった。そのため，学校はできの悪い生徒にもっと学べとプレッシャーをかける必要がなかった。彼らも成績が悪いからといって，烙印を押されることもなかった。反対に，生徒たちや教師でさえ，アカデミックな能力をいくぶん軽視した。本当の名声を得られるのは，運動能力である。私は，勉強ができたが運動はだめだったので，学校生活に関するこの事実に憤っていた。憤るこ

とが賢明かどうかは，いまでは疑わしい。学校で運動があまりにも強調されると非難する人がいる。私は，それほど悪いとは思っていない。よい社会があるとすれば，人は人生のどこかで，少なくとも一度くらいは栄光の瞬間を経験するべきである。たいていの運動選手は，学校を出た後さらに，そのような栄光を達成することはないだろう。われわれ学業にすぐれた者は，今はねたんではならない。我々の時は後からやってくる。ただ，少数のとてもいらつくような例外がいる。運動も学業も優れた奴である。奴らがいるから，ものの正義について信じることができなくなる(16)」。

ホマンズは，セントポールズ校をスノッブ・スクールという。地位や名誉がことさら重んじられているためである。しかしそれ以上のものがあるという。それは，はっきりと表現できないものだが，ものごとに対処するときの「スタイル」だという。ボートレースに関係した儀礼から，討論クラブや校内誌までにあてはまる「スタイル」である。ジェントルマンの「スタイル」である。ホマンズによれば，セントポールズ校の卒業生は，その「スタイル」を備えていると自覚しており，後の人生でも失われることはない。

ホマンズの自伝は，伝統的な名門プレップ・スクールの内側を伝えてくれる。その他にも，無神論者にも聖なるものの存在を認めさてしまう，セントポールズ校の厳かなチャペルの光景がある。一方，セントポールズ校生徒は「ホモセクシュアル」であるという世評に対しては，自己の体験と友人の例から，それを強く否定している。

5．カラベルの脱出

教育社会学を学ぶものなら，ジェロム・カラベル（Jerome Karabel）の名前を聞いたことがあるだろう。最近，カラベルの略歴を知った(17)。カラベルの父は，ロシア系ユダヤ人である。エリス島からブルックリンへ移りすみ，ブルックリン・カレッジを卒業して，労働局の役人であった。マッカーシズムの時代，1952年に左翼系ユダヤ人ということでパージされる。1953年に解雇されて，ニュージャージ州のVinelandで靴屋を営む。そこでは下層中流階級の失望感が漂い，アメリカ社会の公平さについての決まり文句が色あせていた。カラベルは，そのような環境で成長した。それでもカラベルの父は，学業に励むことだけは強調した。

カラベルは，Vinelandの公立学校に通った。高校時代は，本好きの変わり者でトラブルメーカーだった。服装の規則に反対し，学校を批判する者を組織して，ベトナム戦争に反対した。成績だけはよかったが，Vineland High Schoolにいるならば，大学に応募したとしても，よい大学に入学できるような推薦状をもらうことができないだろう。学校の成績証明だけが，Vinelandから脱出するためのチケットだった。カラベルも家族もそのことがわかっていた。

カラベルには，イェール大に入った従兄がいた。彼に相談した。従兄は，Vineland Highを出て，私立のプレップ・スクールに出願するようにと言った。カラベルは，自分の家族では学費などを支払えない。それにプレップ・スクールは，ユダヤ人には入学を許可しないだろうと答えた。しかし従兄は，時代は変わっていることを強調した。今はプレップ・スクールでも，ユダヤ人の入学を認めている。それだけではない。奨学金も出している。プレップ・スクールの中では，エクセターとアンドーバーが一番よい。それらは，ニューヨークのBronx High School of Science

ような優れた学校であるが，全米を対象にして生徒を集めている。

カラベルは，高校の最終学年をエクセターで十分な奨学金をもらって過ごすことになった。メリトクラティックな装置によって，救済されたことになる。当時のエクセターの校長は，その監督教会系の学校をよりアカデミックで，より全国規模で，すべての者により開放的な制度へと変えようとしていた。エリート以外に対して開放的になるのではない。異なるエリートに対して開放的になるということである。カラベルの同学年の中で，54名がハーヴァード大へ進学した。毎年，Vineland High School の首席は，ハーヴァードに志願するが落ちている。カラベルもそうなるところであった。

セントポールズ校が，オールドマネーの「スタイル」を重視するところならば，エクセターやアンドーバーは，前述のアルドリッジによれば，アメリカ型の「食うか食われるか型の実社会を疑似体験させる」場である。アカデミーとよばれるエクセターやアンドーバーの教育目標は，金持の子どもたちが自力で生き抜く価値観や美徳をたたき込むことであった。中流階級と下層中流階級のエリートとの厳しい競争も行われている[18]。エクセターは，19世紀後半から生徒数を急速に拡大していた。全校生徒数は，1880年の200人程度から1930年代には700人になり，それ以後も800人弱である[19]。1960年代後半には，エクセターは，入学者の選考基準をさらに広い層へと拡大していた[20]。ちなみに，クリストファー・ジェンクスもエクセターの出身である。

6．バスケットボール選手の跳躍

最近のニューヨークタイムズ紙のスポーツ欄に興味深い記事があった[21]。それによると，セントジョンズ大学（ニューヨーク）のバスケットボールチームの花形ポイントガードである Erick Barkley が，プレップ・スクールに通うためリバーサイド教会から授業料の援助を受けために，NCAA（全米大学競技協会）から1試合の出場を停止されたとのことである。プレップ・スクールの名前は，メイン・セントラル・インスティテュート（Maine Central Institute）という。23,500ドルの授業料のなかで，3,150ドルを受け取ったことによる処罰である。

NCAA は，リバーサイド教会のバスケットボール・プログラムを主催する人物と将来有望な選手の獲得によって利益を得る大学機関側との関係に注意を払っているようである。この教会の人物によって，エリート運動選手がプレップ・スクールに通うためにどれくらいの援助を得るのかが決まる。教会が，バスケットボールのプログラムを設けて，日曜学校に来る黒人の若者に教えたり，金曜の夜にも練習をする。これ自体は，何も問題がない。しかし将来，プロで活躍しそうな人材に恵まれて，NIKE がスポンサーになると話が違ってくるようだ。プレップ・スクールが一役買うところが面白い。

ニューヨークタイムズ紙は次のように書いている。

「メイン・セントラル・インスティテュートのような，ハイオク（high-octane）のプレップ・スクールは，5年目のシニアを一部リーグ校の選手へと磨き上げてくれる」。

「5年目のシニア」とは，中等学校の第12学年を終えた後の学年という意味である。Erick Barkley は，Christ the King High School という高校の出身である。ステレオタイプ的な常識から判断すると，貧しい黒人家庭の出身で，リバーサイド教会のバスケットボール教室で腕を上げた。

セントジョンズ大学は，難易度の高い大学ではないが，Christ the King High Schoolでの勉強では，とうてい大学入学基準をクリアできない。そこで奨学金を得て，メイン・セントラル・インスティテュートに通い，大学入学の準備をする。そして1部リーグの大学に入学して活躍している。彼はまだ2年生であるが，プロ志望で，6月のNBAのドラフトでは第一順目で指名された。

現在のプレップ・スクールの学年構成を見ると，PG（post graduates）というプログラムを持つ学校があり，少数の高校卒業生を受け入れて大学進学準備教育を行っている。エクセターやアンドーバーにもある。プレップ・スクールの一つの役割である。

7．ジェントルマンのC・対・メリット

名門プレップ・スクールは，多数の卒業生を「ビッグ3」と称される，ハーヴァード大やイェール大やプリンストン大に送り込んできた。プレップ・スクールの存在は，エリート大学の入学者選抜の方法によって影響を受けるし，エリート大学，とくにビッグ3は，学生を供給してくれる伝統的なプレップスクールに配慮しなければならない。ビッグ3のスタッフにはプレップの出身者が多い。ただし彼らは一枚岩ではない。伝統的なプレップ出身の中にも「遺産」派もいれば「メリット」派もいる。さらには，ビッグ3には学業によって上昇してきた公立高校出身もいる。それぞれのグループの競争と葛藤が，ビッグ3の入学者選抜を変化させ，さらにはプレップ・スクールの在り方にも影響を与えてきた。

ハーヴァードやイェールやプリンストンの入学者選考では，アカデミックな要素だけではなく，ノンアカデミックな要素も重視されている。このことは日本でもよく知られている。学業成績だけではなく，品性や出身地域，卒業生の子弟であるか，運動選手であるかなども重要な選考基準になっている。アメリカ東部の私立エリート大学は，そもそも東部のエリート層を満足させしていたとすると，全米レベルでエリート大学としての「格」を示し，時代の要請に答えていくためには，納得させるべき相手も多様にならざるをえない。現在の選考基準は，競合する関係集団の利害に対して，一定のバランスを計った均衡点のようである[22]。

カラベルは，このような入学者選抜方法の「ひな型」がビッグ3に定着したのは，1920年代から30年代にかけての戦間期であったとする。多様な基準に対してバランスをとったような選考基準が，「ユダヤ人問題」と大恐慌への対応の結果として定着した点というのが彼の論点である。カラベルの履歴を知った後なので，彼の問題関心はよくわかる[23]。

当時の学生生活について，カラベルは次のように記述している。

「社交的であり，運動ができて，教養があるというような，調和のとれたルネサンス的な男性が，ジェントルマンの理想像として最高であった。キャンパスライフの中心にあるのは，講義棟やセミナー室ではない。運動競技場であり社交クラブであった。学業は見下されていた。大学には，課外活動の機会がフォーマルにもインフォーマルにもあふれている。真剣に学業に励む者は，文化的資源や金銭的資源がないために，そのような活動に参加できない者である。選択できる者は，キャンパスライフの中では，アカデミックなものよりもノンアカデミックなものを選択する。ハーヴァード，イェール，プリンストンは，楽しい時間を過ごせる場所であった。……またそのような学生生活を通して，将来，ビジネス界でやっていくための貴重な人間関係を築く場でも

あった。この時期，学業がいかにキャンパスライフの周辺に位置したかを示す証拠がある。1927年から33年かけてイェール大に入学した2678名の30年後を追跡した研究結果によると，もっとも成功したビジネスマンは，成績の最も悪い部類に属する層から出現している[24]」。

ここでもイェール大卒である。当時のユダヤ人学生は数の上でマイノリティであったが，文化的にも周辺にいたことはすぐわかる。もちろん例外的な学生はいるが，「ユダヤ系の学生は，大学を上昇移動の装置とみなす。一方キリスト教系の学生にとって，大学は，すでに保障された地位に少々磨きをかける手段にすぎない。ユダヤ系は成績を真剣に考えて，授業と書物にむかうが，プロテスタント系は，ジェントルマンのCを選び，スポーツと社交クラブを重んじる[25]」。

反ユダヤ主義が吹き荒れた時代，ユダヤ人問題への解決策として，ビッグ3の入学基準に学業以外の要素が重視されるようになった。これがカラベルの説明である。コロンビア大がユダヤ系の学生を多く受け入れるようになったために，ニューヨークのワスプ上流層の子弟が，コロンビアを避けるようになった[26]。ビッグ3がワスプ上流階級からの支援を失わないために，学業以外の基準が持ち込まれた。確かに，プロテスタント上流階級の理想とする品性（character）に，男らしさ，リーダーシップ，公共精神，フェアプレーが含まれており，これらが強調されると，ユダヤ系は排除されてしまう。カラベルは，「ユダヤ系は，アカデミックな面での発達が早く，アカデミックな競争だけなら，勝利する。しかし身体の健全さと精神が強調されると，キリスト教系が優秀さを表にだすことができる[27]」と述べている。

反ユダヤ主義の時代はまた，大恐慌時代でもあり，ハーヴァードやイェールやプリンストンといったエリート私立大学でも，授業料を納入できる富裕層を確保する必要があった。伝統的なプレップ・スクールとの関係を密にしなければならなかった。大恐慌時代，ビッグ3への志願者が減少し合格率が上昇した。なかでも，有名なプレップ・スクールからの合格率が高い。志願者はほとんど合格したと言ってよい。カラベルのデータによれば，12の代表的なプレップスクールからのハーヴァードへの合格率は，1930年で93.8%（全体では79.7%），1940年で98.6%（全体で85.5%）であった。

カラベルの提示した，代表的なプレップ・スクールからのビッグ3への合格者数を見ておこう（表1の（1）と（2））。セントポールズとグロトンは，ほとんどの学生がビッグ3に進学する。アンドーバーとエクセターは学生数も多く，ビック3への進学者も圧倒的に多い。新入生に占める12のプレップ・スクール卒業者の割合を見ると，1940年において，ハーヴァードでは19%，イェールでは35%，プリンストンでは30%である。しかしこの時期，とくにイェールとプリンストンでは私立学校出身が圧倒的に多く，イェールでは4分の3，プリンストンでは5分の4を占めていた。ハーヴァードでは，40～50%が公立高校出身だが，大学生活の中心となっている学寮（House）への応募者は，圧倒的に私立学校の出身者であった。

さて，現在ではどのようになっているのか。各校のホームページや私立学校関係のハンドブックに掲載された情報から，最近のいくつかの有名私立学校からどの程度，ビッグ3へ進学しているのかを調べてみた（表1の（3））。確かに，エクセターやアンドーバーやグロトンからビック3へ進学するものは多い。しかし戦間期のように大半がビッグ3に進学するわけではない。様々な大学に進学するが，その中で，ビッグ3が多いという程度である。エクセターやアンドーバーやグロトンでも進学者に占めるビッグ3の割合は，10～20%である。ビッグ3への進学者がほ

表1　プレップ・スクールからハーヴァード大，イェール大，プリンストン大への進学
（1930年，1940年，1990年代）

(1)　1930年におけるビッグ3への進学

Prep Schools	Harvard	Yale	Princeton	計	大学入学者	ビッグ3の%
Choate	10	19	21	50	90	55.6
Groton	19	6	1	26	29	89.7
Hill	1	17	18	36	60	60.0
Hotchkiss	2	42	21	65	76	85.5
Kent	3	14	18	35	42	83.3
Lawrenceville	2	19	59	80	110	72.7
Middlesex	20	1	1	22	24	91.7
Phillips Andover	26	74	14	114	190	60.0
Phillips Exeter	45	54	34	133	270	49.3
St. George's	11	8	2	21	24	87.5
St. Mark's	16	6	2	24	28	85.7
St. Paul's	26	24	15	65	68	95.6
計	181	284	206	671	1,011	66.4
新入生の総数	1,001	850	631	2,482		
プレップ12校の%	18.1	33.4	32.6	27.0		

(2)　1940年におけるビッグ3への進学

Prep Schools	Harvard	Yale	Princeton	計	大学入学者	ビッグ3の%
Choate	10	34	16	60	120	50.0
Groton	16	6	0	22	26	84.6
Hill	3	9	25	37	121	30.6
Hotchkiss	6	59	5	70	90	77.8
Kent	4	14	9	27	62	43.5
Lawrenceville	3	19	54	76	145	52.4
Middlesex	7	4	4	15	23	65.2
Phillips Andover	39	67	23	129	214	60.3
Phillips Exeter	71	49	44	164	252	65.1
St. George's	4	1	8	13	31	41.9
St. Mark's	12	6	11	29	31	93.5
St. Paul's	32	34	14	80	86	93.0
計	207	302	193	722	1,200	60.2
新入生の総数	1,067	861	645	2,573		
プレップ12校の%	19.4	35.1	29.9	28.1		

(3)　1990年代におけるビッグ3への進学

Prep Schools	Harvard	Yale	Princeton	計	大学入学者	ビッグ3の%
Choate 1998	7	*	*		250	
Groton 1995－99	34	25	21	80	400	20.0
Hill 1998	*	*	*		107	
Hotchkiss 1998	5	6	5	16	148	10.8
Kent 1998	*	*	*		170	
Lawrenceville 1999	4	3	8	15	207	7.2
Middlesex 1999	1	0	0	1	88	
Phillips Andover 1998	24	17	*		334	
Phillips Andover 1999	15	20	7	42	334	12.5
Phillips Exeter 1998	14	14	*		334	
Phillips Exeter 1995－99	85	78	34	197	1,629	12.1
St. George's 1998	*	*	*		83	
St. Mark's 1998	*	*	*		73	
St. Paul's 1994	10	11	8	29	139	20.9
St. Paul's 1996－99	33	26	18	77	505	15.2

注1：1930年と40年は，Jcrome Karabel, "Status-Group Struggle, Organizational Interests and the Limits of Institutional Autonomy," の Table 3（p. 22）による。
注2：1990年代については，各校のインターネットのホームページからの情報，もしくは，The Handbook of Private Schools（Boston : Porter Sargent Publishers, 1999）に掲載された情報による。
注3：（3）の＊印は，情報の掲載がない部分である。

とんどいないところもある。戦間期からの大きな変化を示している。

8．テストに憑かれた男

大恐慌の時代，多くのアメリカ人男性が職を失い，困窮を極めた時代にあって，ハーヴァード大のプレップ出身者は，ジェントルマンのCを享受し，豊かな学園生活を営んでいた。批判は内部から立ち上がった。1933年に学長に就任したジョージ・B・コナントが，その急先鋒であった。コナントは，ジェントルマンのCに甘んじる学生を憂い，ハーヴァードに最高の能力を持つ人材を集めようとした。ピューリタン系のボストン出身だが，父親は彫版工（engraver）で中流階級である。Roxbury Latinと呼ばれる私立学校からハーヴァードに進んだ。専門は化学である。Roxbury Latinの入学選抜は，試験の結果だけであった。

コナントは，「社会移動」のアイデアに魅了された人物であった。フロンティアが消滅し，近代産業が急成長する時代にあって，富の世襲よりも能力による社会移動がアメリカ社会の活力になると考えた[28]。コナントは，全米から優秀な学生を選抜し，奨学金を与えて，ハーヴァードに入学させようとした。「貧困のバッチ」と見なされていた奨学金を「名誉」に変えようとした。その片腕となって，SATを入学者選考の基準に取り入れたのが，ヘンリー・チャーンシ（Henry Chauncy）という人物であった。

カラベルは，戦間期のビッグ3において，ワスプ上流階級による支配の定着をみたが，その時期は，ワスプ上流階級の中から，伝統の破壊者を生み出していた時期でもあった。最近，ニコラス・レマン（Nicolas Lemann）による『ザ・ビッグ・テストーアメリカ的メリトクラシーの隠された歴史』と題する興味深い本が出版された。以下は，それを基にしている[29]。

ヘンリー・チャーンシは，ワスプ上流階級の出身である。グロトン校からハーヴァード大へ進んだ，ジェントルマンの品性を備えた，典型的なエリートとみなされる人物であった。グロトンも，極めて有名な監督教会系のプレップ・スクールである。フランクリン・ルーズベルトの出身校でもある。イギリスのパブリック・スクールをモデルにして創設され，監督生制度（prefecture system）を採用していた。「奉仕することは統治することである」が，グロトンのモットーとして知られている。チャーンシは，最高学年の監督生をつとめた模範的な男子で，知的な優秀さと芸術的な創造力を備えていたらしい。ハーヴァードでは，運動選手として優れ，イェールとのアメリカン・フットボールの対抗戦で伝説的なパスを投げたとある。学生クラブの主要なメンバーでもあった。

このチャーンシにとって，ワスプ上流階級との唯一の違いは，父親が牧師であって，家が豊かではなかった点である。そのため，グロトンを卒業した後，1年間，オハイオ州立大学に通った。その後，彼がハーヴァードへ進学できたのは，グロトンのエディコット・ピーボディー（Edicott Peabody）校長が，ウォール街の投資家から援助を得られるように取り計らった結果であった。インフォーマルな奨学金のシステムがあった。

オハイオ州立大学で，チャーンシは心理テストの授業を取った。これが歴史の偶然である。心理テストは，チャーンシの育った階級の信条からすれば，全く相容れないものであった。しかしそれが彼を魅了した。ハーヴァードでは，当時まだ心理学部がなかったため，哲学を専攻した。

そして卒業後は，フットボールでの活躍が認められて高校教師になったが，1年後にハーヴァードの大学院に戻り歴史を専攻し，さらに1929年に副学生部長（assistant dean）になった。副学生部長は，当時では一般に若い人物が採用された。運動選手であり，品性があり，寄宿舎学校を経たハーヴァードの卒業生という，典型的なジェントルマンが選ばれていた。おそらく，有名な私立学校の校長への通過点になるはずだった。

1933年，チャーンシがその副学生部長の時，コナントが学長になり，チャーンシは奨学生の選考のための新しい方法を求められることになる。これがまた歴史の偶然である。IQテストが公立学校に普及し始めていた時代でもあった。当時のハーヴァードは，様々な教科について1週間にも及ぶエッセイタイプの入学試験を実施していた。「大学入学試験委員会(College Entrance Examination Board)」によって運営されていたが，それは10数校の私立高校と大学からなる内輪の委員会のようなもので，ニューイングランドの寄宿舎学校とアイビーリーグ校とを密接に結び付ける絆であった。この入学試験は，主として寄宿舎学校のカリキュラムをどの程度，習得しているかを問うものであった[30]。だから，中西部の公立学校出身の者には極めて不利だった。ハーヴァードでは，当時も西部や南部の高校から成績上位の生徒を入学させていたが，大学での結果は，必ずしも満足できなかった。コナントの求めにより，チャーンシは新しい選抜試験の方法を見つけようとした。それがSATということである。

1934年，コナントは成績証明と推薦状に加えて，SATの得点を用いて，中西部から10名の学生を選抜して奨学金を与えることにした。試験と選考を行い，10名を選抜したが，その8名が4年後にPhi Beta Kappaに選ばれた。1935年と36年にも繰り返されて，その中には，後にノーベル経済学賞を受賞したジェームス・トビンが含まれていた。トビンは，イリノイ大学のスポーツ情報主任（sport information director）の息子で，Champain High Schoolのシニアだった。

Harvard National Scholar Programとして有名な奨学金のシステムである。この成功が引き金となって，チャーンシは，奨学生の選考にSATを利用するように他大学に働きかけた。1937年には，150の試験場で，2005人の高校生が受験した。この時期，ジェントルマンのCの陰に隠れていたメリットに，新しい光が当たり始めたということであろう。ただし，ハーヴァードにおけるメリトクラティックな基準の優位は，1950年代まで続くが，その後，逆コースを辿っている。

チャーンシは，新しく開発されたテストに魅了され，次々と導入を計っていく。そして一連のテストを運営する機関の設立へと動きを進める。今やSATやGREなどのテストを一手に管理・運営するEducational Testing Serviceは，チャーンシを長として発足し，今日の隆盛に至っている。「能力のセンサス」という言葉が使われている。この言葉にチャーンシは憑かれていた。「奉仕することは統治することである」とはグロトンのモットーであったが，グロトンの伝統が，その信奉者の中から破壊者を生み出し，さらに新しい統治の道具を普及させることになった。

9．イェールよお前もか

カラベルのデータが示すように，イェール大は，ハーヴァード大よりも多くのプレップ・スクール出身者を入学させていた。イェールの変革が表に現れるのは，1960年代になってからであ

る。もちろん，コナントによるハーヴァードの改革の影響は徐々に及んでいた。イェールもアメリカを代表するトップのエリート養成機関としてのプライドが高い。「遺産」と「メリット」の間のバランスは，いったん「メリット」へと歯車が回り始めると崩れるのが早く，対校意識が拍車をかける。イェールでもプレップ・スクールの優位は急速に失われていった。最近のイェールの機関誌に入学者選考の変化に関する記事が掲載された[31]。ヘンリー・チャーンシの息子のサム・チャーンシ（Sam Chauncy）が登場する。サムもグロトン校の出身だが，イェールに進んだ。ドラマの主役ではないが，父と同じような仕事に就いている。

1950年代のイェール大は，明らかにワスプ上流階級の伝統をことさら強調しようとしていた。戦前にもなかった「上着とネクタイ」という服装規定が定められたのが，1952年である。当時の学長はウィトニー・グリスウォルド（A. Whitney Griswold）であり，一方で知的な優秀性を高めることを唱えながらも，ハーヴァードのコナントとは異なり，公立学校をアメリカ教育の「腐った杭」だと批判していた。公立高校でもレベルの極めて高い，Bronx High School of Science 出身の学生がイェールに出願しても，この学長にかかると，公立高校は価値がない，高い適性テストの点数は割り引いて考えるべきだ，受けた専門教育は，リベラルアーツに向いていない，家庭が裕福ではないし，家族にイェール出身もいなければプレップの出身でもない，となる。

グリスウォルドの就任から最初の5年間で，Bronx High School of Science 出身の学生はわずか7名しか受け入れず，アンドバー出身は275名に達していた。1957年卒業（53年入学）のある生徒の観察が面白い。

「地方の高校出身の者は，東部の寄宿舎学校出身が自明にしていることを全く知らないと感じる。私たちは，東部の金持ちの多くが，家族や階級や富のおかげでイェールにいると思っている。しかし私たちは，すぐにはっきりとしないかもしれないが，ともかくも，いるに値するからイェールにいる」。そしてこの生徒の結論は，次のようであった。「St. Grottlesex の学生は，社交的な雰囲気を定めている。しかし全般的に見ると，我々が彼らよりもスマートであるという点は，広く知れ渡っているのだ[32]」。

私立学校出身が，57年卒業生の60%以上を占めていたが，その半数も Phi Beta Kappa のメンバーになれなかったし，Tau Beta Phi のメンバーの中では6分の1だった。しかも，多くの生徒を送り込んでいるトップのプレップ・スクール出身の中では，わずか一人しか，Phi Beta Kappa のメンバーになれなかった。全米で知的水準の高さを誇ろうとするならば，これはやはり問題だった。1950年代から60年代前半までの改革は，新入生の出身地域を多様にして，競争率を高めることであった。

改革が具体的に展開されたのは，次の学長のキングマン・ブルースター（Kingman Brewster）の時代である。29歳のインスリー・クラーク（Inslee Clark）が入学担当主任に任命された。大学教官からの強い要求もあり，「最も有能で，最も動機が高く，最も潜在力が高い学生を選ぶ」ことが義務であった。この改革を進めた教官の中に，経済学者トビンがいた。「人探し」は，大都市内部の高校や田舎の高校まで及んだ。

最も重要な改革は，need-blind admissions と呼ばれる入学者選考方法である。志願者のファイルから経済面での情報を取り除いた。つまりイェールの学費を払えるかどうかにかかわらず，入学者を決定する。学費が払えないからといって，入学資格のある学生を拒否できない。これに

よって，すべての社会階級出身の学生が，イェールを希望し，基準をクリアすれば入学できることになる。特権階級の子弟でも，出自ではなくメリットによって入学したことになる。

クラークは，様々な学校を訪問して，イェールを宣伝した。かなり苦労したらしい。これまで鼻であしらってきた学校にも，「頭を下げまくった」とある。ある学校での校長とのやりとりは次のようであった。

「トップのユダヤ人学生をおたくの大学に送るなんて期待しないでくれ。彼は，ニューヨーク市立大かコロンビアに行くだろう。トップの理科系学生を求めないでくれ。彼はMITに行くだろう。イェールなんてこの20年間，どこで何してたの」。クラークが「来年，また来ます。そうすれば何人か応募してくれますか」というように返事すると，「どうかな，しばらくかかるよ」と言われた[33]。

1970年卒業（66年入学）が，クラークが選考した最初の学年だった。58%が公立学校の卒業生で，487の公立学校，196の私立学校から入学者を集めた。そしてSATの平均得点がこれまでで最も高く，ハーヴァードよりも高かった。教官も驚くくらいのできのよい学生が入学してきた。とくに理系の教官は大喜びだった。気にくわないのは，もちろん伝統的なプレップ・スクールの関係者であった。最小限の配慮しかなされていない。卒業生も子弟が入り難くなったことを怒る。

クラークがアンドーバーを訪問したとき，イェールはアンドーバーの成績下位4分の1をどう思っているのか尋ねられた。クラークは知らなかったが，同じ質問が一週間前にハーヴァードの関係者にもなされていた。そのとき，ハーヴァードは，一時期の徹底したメリトクラシーへの傾斜から，後退を続けていた。徹底したメリトクラティックな選考は，1954年がピークで，その後は，すべての志願者が平等を基準に競争することが，ハーヴァードの制度としての利益にならないとされた。ハーヴァードの教官，とくに理科系教官は怒ったが，その怒りは，当時のハーヴァードの入学担当主任の次のような言葉によって吹き飛ばされた。「トップの高校生は，慎み深さがない。かなりだらけていて，覇気がなく，変わり者である[34]」。

ハーヴァードは，誰かが下位4分の1に入らなければならないので，活動的だが，そこにいることでも満足してくれる連中を入学させたらよいと考えていた。運動選手やほどほどのできのプレップ・スクール出身や卒業生の子弟などが「できが悪くても満足」という下位4分の1を構成した。アンドーバーで下位の学生には喜ばれる。

イェールの対応は，反対で，アンドーバーのトップが欲しいと言った。イェールの下位4分の1は，ブリリアントな学生であることは確かだが，ただよい成績を取るよりも，今は他の活動をしているのでよい成績を取れない者であるという説明になる。もちろん，アンドーバーの卒業生のかなり多くが，イェールに進学するという関係に大きな変化は生じていない。むしろ，このクラークの政策で，ニューイングランドの小規模な私立学校からの入学者が，急激に減少した。クラークの判断は，「選抜の厳しいプレップ・スクールは多くの学生をイェールに送り込み続けるだろう。内輪だけでやっているプレップ・スクールは，先では失望する[35]」。1968年，チョウート校からハーヴァードに68人志望して28人が合格，プリンストンは30人中17人，イェールは28人中5人であった。セントポールズや他の有名なプレップ・スクールについても同じような合格率であった。伝統的なイェール支持者からの嘆きの声が聞こえてくる[36]。

10. プレップ・スクールではない，インディペンダント・スクールである

1930年代から40年代に，名門プレップ・スクールの出身者は，大半が「ビッグ3」と呼ばれる，ハーヴァード大やイェール大やプリンストン大に進学した。その時期，ワスプ上流階級の特権が強化されたようであるが，名門プレップ・スクールとビッグ3との連結関係には，ジェントルマンの「スタイル」と「メリット」というように，相対立する要素が含まれていたし，具体的な変化も進行していた。

オールド・マネーのカリキュラムも，メリットへの流れに棹さすことはできない。プレップ・スクール自体は，第2次大戦後の経済的繁栄とベビーブーム，さらに進学熱の上昇などもあって，多くの入学志願者を集めることができた。多くの入学志願者から入学者を選考できたことが，名門プレップ・スクールにとって，メリトクラティックな学校への変化を容易にした。アメリカ上流階級の観察者であるバルツェルも，1960年代には，プレップ・スクールにも，テスト得点を普遍的な能力の基準として重視する傾向が強まった点を確認している。1930年代から40年代に大半の卒業生をビッグ3に送り込んだセントポールズ校も，1965年では，102人の卒業生の中で，ハーヴァードが22人，イェールが13人，プリンストンが7人になっていた。それでも1965年の卒業生は，テスト得点の熾烈な競争によって選抜された，以前よりもはるかに優秀で，39%が全米のテストで高得点を獲得する生徒であった(37)。戦間期からのシェアの低下とともに，大学入学競争が全米に浸透したことを知ることができる。しかしそれも長くは続かなかった。

1960年代の後半がやはり転機であろう。公民権運動以降のアメリカ社会の変化，とりわけエリート大学の変化，さらにはアメリカ社会におけるエリートの定義の変化は，プレップ・スクールにも及んだ。『ベスト＆ブライテスト』は，ケネディ政権の下に集まった全米の若き俊英が陥った，ベトナム戦争に対する愚行の連鎖を描いたが，そのなかで，ワスプ・エリート層の典型とされたマクジョージ・バンディは，グロトン出身のイェール大卒で，傑出した人材としてハーヴァード・カレッジの学長からホワイトハウスに入った。ハーヴァード・カレッジ時代は，メリトクラティックな改革の先鋒であった(38)。バンディに象徴されるような，ワスプ上流階級の権威の失墜は，それまでのメリトクラティックな基準の優位をも揺るがせた。

「プレップ・スクールではない，インディペンデント・スクールである」とは，ロードアイランド州にある伝統的な私立中等学校の校長の言葉であった。旧来の「エリート」と同義で用いられてきた「プレップ」との線引きが，強く意識されていた(39)。プレップ・スクールの教育の歴史と現状を詳細に調べたアーサー・G・パウエルによれば，60年代後半のプレップ・スクールに生じた主要な変化の一つは，アカデミックな基準の持っていた権威が失墜したことである。旧来のリベラルアーツ型のカリキュラムが批判されると同時に，学業成績という基準を最優先することも拒否されている(40)。

現在では，たいていのプレップ・スクールを見ると，スポーツや芸術のカリキュラムが広く提供されており，進学カウンセリングや心理カウンセリングも充実している。また選択科目が大幅に増えて，個別のトピックが教えられている。そして個々の学校は，それぞれの科目の内容や教え方を競うようになっている(41)。生徒の個別のニーズへ細かく対応しようとする傾向が「個性化」(personalization) と呼ばれている(42)。名門プレップ・スクールの現在の姿であるが(43)，

1970年代以降の具体的な変化については稿を改めて詳述したい。

注

(1) Thomas D. Snyder ed. *120 Years of American Education : A Statistical Portrait* (U. S. Department of Education, 1993) の Table 9 (pp. 36－37) を基にしている。公立学校以外の中等学校に就学するする者は，1920年代から10%前後で推移している。

(2) アメリカ合衆国における私立学校の多様性については，Otto F. Kraushaar, *American Nonpublic Schools : Patterns of Diversity* (Baltimore and London : The John Hopkins University, 1972) ならびに，Bruce S. Cooper, "The Changing Universe of US Private Schools," in Thomas James and Henry M. Levin eds. *Comparing Public & Private Schools, Volume 1 : Institutions and Organizations* (New York, Philadelphia and London : The Falmer Press, 1988), pp. 18－45を参照した。ただし，女子私立学校に関する文献は少ない。本稿でも，私立男子校を扱う。名門プレップ・スクールが男女共学になったのは，1970年代以降である。

(3) 望田幸男編『近代中等教育の構造と機能』(名古屋大学出版会，1990年) の第8章と第9章が，アメリカのプレップ・スクールの歴史を扱っている。また19世紀後半のセントポールズ校を扱った，田中智治「19世紀後半のニュー・イングランドにおける寄宿制学校の教育理念－ジェントルメンの形成について」(『日本の教育史学』第33集，1990年，194～209頁) がある。最近の紹介としては，田中義郎編著『プレップ・スクール－アメリカのエリート中等学校の教育』(C. S. L. 学習評価研究所，1997年)，石角莞爾『アメリカのスーパーエリート教育』(ジャパンタイムス，2000年) がある。

(4) G. William Domhoff, *Who Rules America Now ? : A View for the 80s* (Prentice-Hall, 1983) に上流階級の指標とみなされうる，私立中等学校のリストがある (pp. 44－46)。分類は，論者によってやや異なる。E. Digby Baltzell, *Philadelphia Gentlemen : The Making of a National Upper Class* (The Free Press, 1958 ; reprint, The University of Pennsylvania Press, 1979) では，最も威信の高い寄宿舎学校として16校があげられている (p. 305)。

(5) C. W. ミルズ (鵜飼信成・綿貫譲治訳)『パワー・エリート　上』(東京大学出版会，1969年)，99～109頁を参照した。

(6) クックソンとパーセルは，プレップ・スクールを，アカデミー，監督教会系学校，企業家系学校，女子校，カトリック系学校，西部校，進歩主義学校，クエーカー系学校，ミリタリー・アカデミーに9分類している。アンドーバーとエクセターは，18世紀に設立された大学進学のための学業を重視するアカデミーに属し，セントポールズ校やグロトン校は，イギリスのパブリック・スクールをモデルにした監督教会系学校である。ジョン・F・ケネディが出たチョート校やイェール大学入学準備のために設立されたホッチキス校などは，企業家系学校に分類されている。Peter W. Cookson, Jr. and Caroline Hodges Persell, *Preparing for Power : American Elite Boarding Schools* (New York : Basic Books, 1985), pp. 36－44.

(7) ネルソン・W・アルドリッチ Jr. (酒井常子訳)『アメリカの上流階級はこうして作られる　オールドマネーの肖像』(朝日新聞社，1995年)，68頁.

(8) 同書，70頁.

(9) スコット・フィッツジェラルド「楽園のこちら側」『現代アメリカ文学全集3　フィッツジェラルド』(荒地出版社，1957年)，256頁.

(10) スコット・フィッツジェラルド (野崎隆訳)「泳ぐ人たち」『フィッツジェラルド短編集』(新潮文庫，1990年)，222頁.

(11) 同書，220頁.

(12) George Caspar Homans, *Coming to My Senses : The Autobiography of a Sociologist* (New Brunswick and London : Transaction books, 1984), pp. 51－61.

(13) *Ibid.*, p. 52.

(14) *Ibid.*, p. 53. もちろんすべてのイェール進学者がそうであるわけではない。ハーヴァード進学者の

ジョークとして受けとるべきであろう。

(15) *Ibid.*, p. 55.

(16) *Ibid.*, p. 57.

(17) Nicholas Lemann, *The Big Test: The Secret History of the American Meritocracy* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1999) の pp. 245－248 による。

(18) ネルソン・W・アルドリッチ Jr. 前掲書，212～213 頁.

(19) E. Digby Baltzell, *The Protestant Establishment: Aristocracy and Caste in America* (New York: Random House, 1964) の p. 127 による。セントポールズ校は，1900 年に卒業生が約 100 名で，その後もあまり変化はない。ちなみに，*The Handbook of Private Schools* (Boston: Porter Sargent Publishers, 1999) によると，1999 年のエクセターの卒業生数は，334 名（全校生 1,000 名），セントポールズは 128 名（全校生 513 名）である。

(20) エクセターの内側については，Alan H. Levy, *Elite Education and the Private School: Excellence and Arrogance at Phillips Exeter Academy* (New York: The Edwin Mellen Press, 1990).

(21) *The New York Times*, Saturday, March 4, 2000.

(22) 現在のハーヴァード大の入学者選考については，David Karen, "Toward a Political-Organizational Model of Gatekeeping: The Case of Elite Colleges," *Sociology of Education*, Vol. 63, pp. 227－240, 1990.

(23) 以下は，Jerome Karabel, "Status-Group Struggle, Organizational Interests and the Limits of Institutional Autonomy: The Transformation of Harvard, Yale, and Princeton, 1918－40," *Theory and Society*, Vol. 13, pp. 1－40, 1984 による。

(24) *Ibid.*, p. 7.

(25) *Ibid.*, p. 8.

(26) ニューヨークの上流階級が，20 世紀初頭にコロンビア大学を避け，ビック 3 を選んだ点については，Richard Farnum, "Patterns of Upper-Class Education in Four American Cities: 1875－1975," in Paul William Kingston and Lionel S. Lewis, eds. *The High-Status Track: Studies of Elite Schools and Stratification* (State University of New York Press, 1990), pp. 53－73. またユダヤ系学生の定員割当制について扱った研究として，Marcia Graham Synnott, *The Half-Opened Door: Discrimination and Admissions at Harvard, Yale, and Princeton, 1900–1970* (Westort, Conn.: Greenwood Press, 1979). リプセットとベンディクスの社会移動の研究のなかで，「ユダヤ人が一流のクラブやイートン，ハロウのような学校に入ることについて，アメリカのそうしたクラブや学校に関しては障害や制限があるのに，なぜイギリスで何の制約もないのか」という疑問を投げている。リプセットとベンディクスはユダヤ系の社会学者である。この疑問の背景は明らかであろう。彼らは，「おそらくある社会で，人々の地位がはっきりと規定されていれば，それだけ，地位の障壁を維持するための意識的な強調は，必要でなくなるのであろう」としている。アメリカの伝統的なエリート層であるワスプ上流層の地位の輪郭は，非常にあいまいで，他からの侵食を受けやすいため，線引きを繰り返さなければならない。線引きの一つの手段が，プレップ・スクールであったことになる。セイモア・リプセット，R. ベンディクス（鈴木広訳）『産業社会の構造』（サイマル出版会，1969 年）の 45～46 頁.

(27) Karabel, "Status-Group Struggle, Organizational Interests and the Limits of Institutional Autonomy: The Transformation of Harvard, Yale, and Princeton, 1918－40," *op. cit.* p. 16.

(28) 当時の「社会移動」の概念については，クリストファー・ラッシュ（森下伸也訳）『エリートの反逆 現代民主主義の病い』（新曜社，1997 年）の第 3 章。

(29) Nicholas Lemann, *The Big Test: The Secret History of the American Meritocracy, op. cit.*, pp. 3－95, による。

(30) 鶴見俊輔氏は，1930 年代にプレップ・スクールの一つ，ミドルセックス校で学び，エッセイを求める「カレッジボード・イグザミナーション」を受けて，ハーヴァード大に入学している。鶴見俊輔『期待と回想　上巻』（晶文社，1997 年）の 15～25 頁に当時の様子がある。表 1 も参照されたい。

(31) Geoffrey Kabaservice, "The Birth of a New Institution : How Two Yale Presidents and Their Admissions Directors Tore up The 'Old Buleprint' to Create a Modern Yale," *Yale*, December, 1999, pp. 26－41 による。また Nicholas Lemann, *The Big Test: The Secret History of the American Meritocracy, op. cit.*, pp. 140－154 も参照した。

(32) Geoffrey Kabaservice, "The Birth of a New Institution : How Two Yale Presidents and Their Admissions Directors Tore up The 'Old Buleprint' to Create a Modern Yale," op. cit., p. 30.

(33) *Ibid.*, p. 35.

(34) *Ibid.*, p. 37.

(35) *Ibid.*, p. 37.

(36) ジョージ・W・ブッシュアメリカ合衆国新大統領は，父のブッシュ元大統領と同じく，アンドーバーからイェール大へ進学した。父は，ベースボール・チームのキャプテンであり，Phi Beta Kappa のメンバーでもある。それに対して，息子は，1968年卒業のジェントルマンのCタイプの学生であった。タイム誌（Time, August 7, 2000）に詳しい記事がある。ブッシュ家については，越智道雄『ワスプ（WASP）：アメリカン・エリートはどうつくられるか』（中公新書，1998年）に詳しく述べられている。

(37) E. Digby Baltzel, *The Protestant Establishment Revisited*（New Brunswick, USA and London, UK : Transaction Publishers, 1991），p. 91.

(38) デイヴィット・ハルバースタム（浅野輔訳）『ベスト＆プライテスト　上』（朝日文庫，1999年）の115～123頁に，グロトンとイェール大学時代の様子が詳しく書かれている。

(39) 2000年3月2日に，筆者がロードアイランド州のモーゼス・ブラウン校（Moses Brown School）を訪問した際，ジョアン・ホフマン（Joanne Hoffman）校長から聞いた言葉である。モーゼス・ブラウン校は，クエーカー系の学校だが，上流階級の指標に入っている。G. William Domhoff, *Who Rules America Now ? : A View for the* 80 *s, op. cit.*

(40) Arther G. Powell, *Lessons from Privilege : The American Prep School Tradition*（Cambridge, MA and London, UK : Harvard University Press, 1996），pp. 180－181.

(41) *Ibid.*, pp. 187－191.

(42) *Ibid.*, p. 196.

(43) 2000年3月2日にロードアイランド州にある，アイビーリーグ校の一つ，ブラウン大学のマイケル・ゴールドバーガー（Michal Goldberger）入学選考主任（Admission Officer）に面会した。表2は，1999年度の新入生（2003年卒業クラス）の選考結果の中で，SATの得点を示している。選考は，メリットクラティックではない。多様な要素のバランスが重視されている。現在のプレップスクールもそれに対応している。

（教育社会学講座　助教授）

表2　1999年度のブラウン大学の志願者と合格者におけるSAT得点の分布

Verbal	応募者	合格者	合格者の%	入学者	入学者の%
750－800	3,004	867	29%	406	28%
700－740	3,257	648	20%	354	25%
650－690	3,224	453	14%	288	20%
600－640	2,322	269	12%	172	12%
550－590	1,259	161	13%	123	9%
500－540	564	51	9%	40	3%
450－490	237	15	6%	14	1%
400－440	109	7	6%	6	0%
300－390	46	0	0%	0	0%
200－290	3	0	0%	0	0%
得点なし	730	39	5%	24	2%
計	14,755	2,510	17%	1,427	100%

Math	応募者	合格者	合格者の%	入学者	入学者の%
750－800	3,109	823	26%	351	25%
700－740	3,677	671	18%	401	28%
650－690	3,275	507	15%	318	22%
600－640	2,219	299	13%	215	15%
550－590	1,087	107	10%	70	5%
500－540	422	49	12%	34	2%
450－490	176	15	9%	14	1%
400－440	47	0	0%	0	0%
300－390	13	0	0%	0	0%
200－290	0	0	0%	0	0%
得点なし	730	39	5%	24	2%
計	14,755	2,510	17%	1,427	100%